士の資格を取らしてくれるというのだ。事務的な仕事はいやで、何か資格をとって働きたいと思っていた母は、この募集に申し込んだのである。歯科衛生士というのは、戦後にできた、当時としては、めずらしい職業で、雑誌などにも、最新の職業として載っていたという。自分一人だけで、生きたいという気持ちの強かった母は、働きながら学べるということが、魅力だったという。

試験にうかり、採用される事になった。月曜から土曜日は、愛知県歯科衛生士養成所にかよい、日曜日は、歯科で、手伝いをしたという。このように、休日のない生活が一年間つづいた。この養成所は、当時この地方では愛知県にしかなったので、東海各地方の歯科医の娘などがきていたという。母は、ここで勉強し、国立病院などへ、研修にも行ったという。

ふつう、養成所などには、修学旅行はないのだが、母達は、修学旅行をさせてくれと、所長にたのんだ事があるという。しかし学校からは、行かしてもらえず、自分達だけで、修学旅行をやったという。たった1年間だけの養成所の生活だったが、この時のクラスメートとは、今でもつきあいがあるという。

こうして、卒業試験をうけ、国家試験をうけ、歯科衛生士となった母は、それまで日曜日だけかよっていた歯科に、正式に採用されたのである。その頃の歯科は、だんだん組織化され、急速に進歩しつつある時であった。

母の勤めた歯科は、その先頭をいく施設・器具をもっていたという。はじめて、ビルの中に歯科を独立させたうちの一つであった。母の勤めていた歯科は、当時の丸栄デート専属の通訳を呼んできて話したという。

このような歯医者で、目のまわるようないそがしい中で働いていた母は、歯科衛生士も、歯科医についていなければ仕事ができないと思い、自分一人で、身をたてようと考えたのだった。そして、昔、進みたかった洋裁学校へ通よおうと決心し、高校を卒業してから8年間働いた歯科をやめたのだった。母は、洋裁学校の校長に、直接会い、ある程度洋裁ができるので、第2学年から入れてもらう事と、親に負担をかけたくないので、もし、教材費などが自分の力で払えなくなった時には、助けてもらいたいという事を、たのんだという。こうして貧しいながらも、デザイナーを夢みた生活がはじまった。四時に学校が終り、それからすぐに歯科へアルバイトへ行って、学費を稼いだという。一年間、このアルバイトは続いたが、そこの歯科医とけんかをして、やめてしまったという。意志の強い反面、気も強かったのだろう。洋裁学校に入って、1年半、あと半年で卒業という時に、母は、父と結婚した。それで残りの半年、新婚生活をしながら学校へも通い、3月に卒業した。

母はデザイナーとして、就職する事はなかったが、家計を助けるために、服の仕立てをしたり、洋裁の塾を開いたりした。私が子供の頃、学校から帰ると、母はいつも服地を手にして洋裁をしていたのを思い出す。

親には絶対負担をかけたくないという気持で、母は、常に行動していた。そして、自分一人で、生きていこうという気持ちでいっぱいだった。母のこうした強い気持は、自分の家庭での、嫁、姑嫁の、いやらしい関係を見て、結婚というものへのあこがれが全くなかった事から出てきたという。結婚というものを、人生のすべてと考えがちな女とはちがって、母は、自分の人生を、自分で考えたのだと思う。母は、この時が、今から思えば青春だったと言う。母が、いっしようけんめい考えて進んできたように、私も、これから進んでいきたいと思う。

〔Ⅱ〕古典Ⅰ乙における表現指導

―― 徒然草の読解をふまえた鑑賞文の指導 ――

斉　藤　真　子

A　ねらい

① 古文においても「現代国語」と同様に、読み味わうものとして受けとめさせる。これは、中学における古典の取扱いからも、また、古典と現代国語を統一したものと考える「国語Ⅰ」の設定からも当然といえる。

② 自分の考えを文章化する前段階で、授業内容を整理し、理解がなされているか再確認させる。

③ 作者の物の見方、考え方を自分なりに、共感的比判的にとらえることによって、自分の考察をまとめさせる。但し、読解に重点をおくので、作品

論や作家論を書かせるとは考えない。

④ 鑑賞文を発表させることにより、生徒相互に検討させる。

⑤ 他の章段への興味をよびおこさせ、徒然草の世界と時代への理解を深めさせる。

B 指導の計画

1. 教材の章段<資料15>の授業（10時間）
2. 鑑賞文の指導

最後の授業終了時に、鑑賞文を書くことを予告し、次の4つの題目について注意しながら、教科書をよく読んでくるように指示。

① 作品全体について理解しておくこと。

② 作者について一応の特徴を知っておくこと。

③ 自分が書けそうな章段を特に選んでもよいし、また、文章中感銘をうけたり、重要と思われた語句、文だけを取りあげてもよいこと。

④ 徒然草の文体について。

3. 鑑賞文を書く。（1時間）
4. 自分の鑑賞文を読む。（1時間）

C 生徒の鑑賞文（資料10）～（資料14）

但し、資料13、14は教科書に採られていない章段

D おわりに

① 徒然草は、高1の入門教材として必ず採られるものであるが、文法教材としては適当である反面、内容的に、人生経験が未熟である生徒達には、むずかしくて、読み味わうことが出来ぬと思われる教材も部分的にある。そうした教材は、徒然草の本質を理解する上で重要であるが、生徒達は、教師の解説に多くを依存して、受身的学習にとどまる。現代の感性で十分批判し、共感できる意味内容を持った文章教材としては、取扱われていないのが現状であろう。鑑賞文を書こうという姿勢のの中に、それを乗り越える一つの道が見出せるのではないかと考える。

② 徒然草は230余段のうち教科書でとりあげられるのはせいぜい10段余であるという分量の問題がある。自主学習が出来るような指導で全体像をつかませたいと考える。

③ 「何故、古典を学ばなければならないか」と問う生徒や、文法をきらう成績下位の生徒、要するに、古典に興味を持ちえない者に対しては、随筆「徒然草」のような思索的な文章は、適当でないか。また、読解指導後に、計画的に鑑賞文を書かせることによって、その鑑賞が幼稚なものであっても、古典への興味をよびおこせるのではないかと考える。

また、古典に対して興味を持つ者にとって、鑑賞文をまとめる過程で、多方面にわたって古典一般への深い関心をよびおこすことができるものではないかと思う。ひいては、古典学習への態度の転換も意図できる。

④ 古典の鑑賞文授業を今後すすめるための教材としては、万葉集、枕草子、方丈記など、歌集や随筆などを中心にできるのではないか。高1の古文は文法に時間がとられがちであるが、現国と同様な取り組み、古典を現代に生かす読み取りをしたいと考える。

（資料10）

今も昔も、人の考え方は変わっていないなって思いました。人間の弱いところとか精神の持ち方など、いろいろな面で、うなづけるところがあります。

兼好という人、世の中のことをよく観察していると思います。

「世に語り伝ふること」の中では、人間のいやらしいところが、5つのうそで表してあるところからわかります。

私にとって一番身にしみたのは、「ある人、弓射ること習ふに」の中の、現在やろうと思うことをすぐに決行できない難しさです。いつも「まあ、いいや。」とか「明日やれば」って思ってのびのびになっていくのです。

こんなに短い文章なのに、心につきささってくるものがちゃんとあります。最初は例をあげて最後に自分の考えをまとめあげているところに、すごいなあって感じます。

また、″花は盛りに″で一番最後の文、「大路見たるこそ、祭り見たるにてはあれ。」がとても印象的でした。この世の栄枯盛衰にかねて見ている作者の鋭さ、悲しさが伝わってくるのです。

徒然草、もっとたくさん読んでみたいって思います。ひとつひとつの文章に教えられること、共感することがたくさんあるからです。

人間が本質的には変わっていないことが、何とも不思議に感じられます。

（資料11）

古文には、もの悲しい響きがある。言葉の流れ、日本独得のおちついた言葉使い、表現の仕方のせいだろうか（序段）の″つれづれなるままに″などは、なめらかな文章のつながりが、とてもいい、何の抵抗もなく、ついと口を出てきそうになる。″つれづれ″″日

暮し″″よしなしこと″″そこはかとなく″などの言葉は、現代語に直しようのない、おもいいれがたっぷりと感じられる。ただ、その内容の″不思議なほどきちがいじみている″というのには賛成できないが、おちついた、気品を感じさせる文章が非常に気に入った。（第11段）の″神無月のころ″もいい、著者の裏切られたような感情が、古文の持つ哀愁といったものに、ぴったりと合っているように思う。″古文″というものを、このように見つめ、感じた私には、（第52段）の″仁和寺にある法師″を感覚的にすんなりと受け入れることが出来ないでいる。″仁和寺にある法師″は、「ちよっとしたことにも、案内者はほしいものだ」ということを感じ得た、一種の笑い話のように思う。だから、古文で描くなら、物悲しさを表してほしいと感じた。

（資料12）

神無月という季節といい、庵の様子といい、美しさがしんとしみるような前半部分から、少々教訓的な後半部分へのうつし方など、話の進め方がうまいなあと思った。最後の一文は、その時の法師の表情変化を思ったりすると、なかなか面白いとも思うが、考えてみればいやらしい一文である。人を疑っている庵の主人を憂える法師を純潔の人、ととろうとすればできないでもないが、一方、口うるさいジジイじゃ、とも思うのだ。木の持ち主がその木をどうしようと彼の勝手である。第一、木を囲った理由だって、鳥から木を守るための、いわば木のためを思ってのことだったかもしれない。それを勝手に盗難予防だと考えるのは、法師の心の中に″あれじゃ柑子がとれんではないか。″という思いがあったからではないか？大体「この木なからましかば」とは何じゃ？なくなれば良いのは囲いであり、木ではない。こんなところにも、欲しいものを手に入れそこねた法師の、理性のみだれがあるのではないだろうか。

古文をこんな風にひねくれて解釈するのは邪道かもしれない。しかし、兼好法師もパーフェクトの人ではないと思うところに親近感も生まれるのだ。

（資料13）

第74段　蟻のごとくに集まりて、東西に急ぎ、……

徒然草の作品は読んでいて楽しい。私も、その日その日によって気分が違う。しかし徒然草を数段読めばその時の気持ちにぴたりと合うものが必ずあるものだ。そんな時程喜しい事はないし、時代の違いを忘れ兼好法師に、人間的な、親近感を持つことができる。この74段は、真剣に物事を考える様な時に読むもの。

私はまだ若いし、この先もまだ長いつもりだ。生死について考えたことなんてない。でもこれを読んで、共感というより、恐怖を感じたのだ。もちろん現在の自分と兼好法師のいう蟻が同じだとは思はない。そこまで自分を見下す気にはならないけど、毎朝ラッシュの中にいる自分を思い浮かべ自分の″存在″価値について考えざるにはいられなかったのだ。

兼好法師は一体何が言いたかったのだろう。ただ単によしなし事として片づけてしまっていいだろうか、私には徒然草の主題がここにあるように思える。どんなに面白い事を書いても、何を論じてみても、″変化の理を知らねばなり″の一言の前には全てがくずれてしまう。

（資料14）

第184段　相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける守を入れ……

私がこの段を選んだのは、北条氏のゆかりの者達に興味があるからであるが、作者は文中で松下禅尼の事を「世を治むる道、倹約を本とす。女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つ程の人を、子にて持たれける。まことに、ただ人にはあらざりけるとぞ。」「政道は倹約を根本とする。女性ではあるが、その心は聖人の心に通じている。天下を長く持ちこたえさせるぐらいの人（時頼の事）を子にお持ちになっている。本当に普通の人ではなかったのだと伝え聞いたことである。」と、評価している。この時代の男性は、一般に女性を低く見る傾向にあったはずだが、作者が松下禅尼の事を高く評価しているのはどういうわけであろうか。この段によって松下禅尼の偉さが人々に広く知られるようになったという事ではあるが。

ここで作者の時代を考えてみたい。鎌倉の末期、北条高時が執権であった頃だ。

北条九代記には、「安藤又太郎の乱、渡辺右衛門尉の紀伊の国『安田荘司』の謀反、大和の国、越智四郎の謀反など、鎌倉幕府に恨みを持つ者が少なくなかった」と書かれている。とすれば、この段の文章は、作者の幕府に対する批判とみることは出来ないものであろうか。現に、そういう意見もあると聞く。

私はそういう風に考えてみると、どうも作者の禅尼に対する賞賛は、同時に高時以下の幕府の要人への失望と怒り、そして改まって欲しいという願望をもあらわしているように思えてならないのである。

そして、又これは、南北朝初期の二条河原の落書に類するものだと私は思っている。

ところで、私が考えてみるところによれば、作者は鎌倉末期の乱れた時代の人であるにもかかわらず、平安や鎌倉初期の思想になじみが深いようだ。北条九代記のような思想（もっともこの本は鎌倉初期に書かれ

たのではないらしいが）がみられるところからもそれをうかがうことができると思う。

ただ、ちょっぴり残念なのは、兼好も男尊女卑の考え方が頭からぬけていなかったらしいという事である。

私は、「この段では、松下禅尼の偉さに感心するだけでなく、この文章が書かれた時代背景やその時代の人々がどういう人であったのか考えてみることも大切であり禅尼と対比させて考えてみるとおもしろいだろう」と考えたが、成程古典というものは、私達にいろいろな事を教えてくれ、考えさせてくれるものだと感心した。

（資料 15 ）

「新選古文上」　（尚学図書）

四　随筆　徒然草

序　段　つれづれなるままに、日暮らし、す　りに向ひて、心にうつりゆく……

第 11 段　神無月のころ、くるす野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること……

第 52 段　仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ、心うくおぼえて……

第 61 段　名を聞くより、やがておもかげはおしはかるるここちするを、見る時は、また……

第 73 段　世に語り伝ふること、まことはあいなきにや、多くはみな虚言なり。あるにも……

第 92 段　ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に向かふ。師のいはく……

第 137 段　花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは、雨に向かひて月を恋ひ、……

第 141 段　悲田院の堯蓮上人は、俗姓三浦のなにがしとかや、双なき武者なり。ふるさと……

第 150 段　能をつかんとする人、「よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ。……

第 170 段　さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行き……

（本文は「日本古典文学大系」による）